

嘉永刪定神代文字考

香林書冊

一冊	三架	二三八六	一八四六	和書門類
----	----	------	------	------

409

二七函架	一八四六	和書類
------	------	-----

内閣文庫		
番號	和	18486
冊數	1	(1)
函號	207	409



嘉永刪定神代文字考 全

余嘗鶴峯先生從游。神代文字。說ヲ聞ク。神代文字ハ太古我。神聖ノ創メ玉フ處。太古ノ穴町ヨリ起レルモノナリ。穴町ハ益ハ意思金神ノ深慮遠謀ヨリ出テ四十有七ノ象兆有リ。スナチ天津詔刀ノ太詔刀ノアラハルノ所ナリ。大穴持命ニ至リ取テ書契トシ。四方ノ志ヲ通シメ玉フ。梵字漢字及西洋文字モ其體各異ナリトイ。臣其筆畫ハ皆此神字ニ原據スルコトイカト云ニ。五大洲ハモト亞細亞ヨリ開ケタリ。亞細亞トハ神ト云我。神聖首出ノ郷ナルガ故ニ。亞細亞洲ト名クカクテ易ニ帝震ニ出ルト有テ天下ノ事物ハみな東方ヨリ始ル。世典ノ伊舎那天。漢籍ノ天靈氏。地靈氏。スナチ我。伊婁諾伊婁冉ニ靈ノ御事。或童子ト申シ。或小童君ト稱スルハスナチ我。少彦名ノ御事。太皇太后我。大國主ノ大神ノ御事。故ニ天下ノ古説ハみな我古傳説ト異ナラズ。天下ノ事物モ彼此相同ジキ道理ナリ。就中文字ハ万世ニワタリテ易ナルモノナレバヨク其理ヲ推ス時ハ天下ノ字ハ神字トヒトシキコト分明ナリ。此大義ニ通ズレバオノカクテ天地ノ物ヲ理ヲ窮ムルニモ至ルベシ。神代文字考ハコレガ為ニ著ハス所ナリ。考證確切。按定無訛。實ニ國家ノ忠義心ヲカタルベキ書。記メテ四方好古士ニ告ルコト爾リ。

受業 中枝幸彦 識

之神代文字考序說

淺草文庫

鶴峰戊申季尼撰



皇國今兼用漢字。佉字者。西夷所用。所謂蘭字是也。三體中。梵與佉者。切韻相合生字。獨漢字者。取之於六書之法。雖其體各異。至點畫筆法。則皆本於我神聖所創。太古穴町者也。惟夫彼取之於

我耶。我取之於波耶。今有說矣。按帝典所傳。皇祖天神之兒。千五百頭。中有少彥名神。不順天神之教養。自其指間漏髓。是謂其自天降自立於海外也。求之於梵。說曰。梵王化形下利人間。是名大自在天。大自在天之中。有伊舍那天。自在天之子曰梵天子。梵天子之中。有童子天。按童子天。則蓋少彥氏也。當大國主神之理。天下少彥氏乘

扁鵲。來于我神州。與大國主神戮力一心。從事經營。始定治療之方。製禁厭之法。後去復適海外。索之於漢籍。班固漢武內傳。記扶廣山青真小童君。以金書祕字。授武帝之事。謂扶廣山者。扶桑之山。小童君者。形有嬰孩之貌。故以為狶。又有紫陽真人者。嘗到桑林。登扶廣山。遇小童君。受金書祕字。見于其傳。謂小童君。蓋少彥氏也。如是則梵

佉文字。豈無益出於少彥氏所授乎。且西洋古傳
 有之。太古有婦人。字曰海。其女名亞細亞。招婿於
 西方生子。曰歐羅巴。曰亞弗利加。乃四大洲中。亞
 細亞先開。歐羅巴。亞弗利加。次之。我神州居亞
 細亞之極東。日出之處。稱之豐葦原中國。而亞細
 亞之音。與葦原之訛相近。則稱亞細亞者。豈無取
 義于此歟。彼言亞細亞者。即神聖之謂也。以神聖

首出之鄉。故尊稱為亞細亞洲。是亦類西域記所
 云。南閻浮提之地。東是人主之國。人多禮義。漢說
 亦以東方為聖人所起。易曰。帝出于震。而震者木
 也。王者則之。首以木德王天下。事見于孔子家語。
 按東方朔十洲記云。扶桑地方万里。上有太帝宮。
 大真東王父所治之處也。雲笈七洞部引老子中
 經云。東王父名曰伏羲。是也。又春秋元命包載下姜

嫫游扶桑履大人迹而生后稷之說引孔子之語
 曰扶桑者日所出房所立其耀盛蒼神用事精感
 姜嫫而生古書所傳豈無據也嗚呼聖人之起于
 我神州者何止宓犧氏后稷三皇氏亦出于此
 春秋命歷序曰三皇氏乘雲祇車駕六提羽而出
 谷口谷口一曰暘谷淮南子曰日出于暘谷拂于
 扶桑暘谷或作湯谷山海經曰湯谷上有扶桑湯

谷之名蓋起自伊豫湯郡遂為我神州總稱谷
 口者上古所謂六門也河圖括地象云地之門大
 荒東經云東口之山蓋亦是也則詩謂東風曰谷
 風復亦起于此也而天皇氏辨曰天靈地皇辨曰
 地靈自合我二靈之尊稱猶梵說伊舍那天耳
 然則天靈地靈者我二靈而安知不宓犧者為
 我大國主神又雲笈引太平經云文者生於東明

於南。故天文生東北。故書出東北。而天見其象。是知真文之初出。在東北也。由此觀之。篆書亦原于我神字。而倉頡從引神之耳。古人言三皇之事。若存若亡。五帝之事。若覺若夢。雖然孔子於易。首伏羲。而我今據帝出乎震之語。則以此徵之。世孰斥為虛誕。或人嘗引證古書。以作三五出于我神州之說。不可謂必不然也。然其為說。牽強頗多矣。

是所以取嘲也。蓋漢人之來于我神州。始度海。至對馬。次壹岐。次九州。次四國。而至大日本也。列子等所謂五山者。或是也。而被以為是海市也。如富士山。則孝靈天皇五年所涌出。本朝通鑑等傳之。而被以為扶桑之根。誰能信之乎。今申之所記者。非敢建異見。喜演奇說。獨徵乎神代文字所由来而已。讀者察諸。

是あり。七より下小いまでハ饒速日命の天神

より相羨一終つる處の神言小いて天孫本紀及

職負令集解小見えたり。戊申其據有を知り向小

鍔水文字考等の書を著ハ一つれどもいまご其

明證を得ばして世小あまねく弘むる小も及バ

さるゝがらび正しき明證を得るる故小今

まゝ此畧述と作るハ大方小質きんとてあり。先

阿奈以知四十七字母配合五十音之圖を示は

ア
フ
カ
ノ
サ
十
タ
下
ナ
モ
ハ
十
マ
ト
ヤ
ノ
ラ
上
ロ
ノ

イ
レ
キ
レ
シ
セ
チ
レ
ニ
牛
ヒ
七
ミ
ヒ
イ
レ
リ
レ
井
ノ

ウ
ノ
ク
ノ
ス
フ
ツ
レ
ヌ
ト
フ
ノ
ハ
フ
ユ
レ
ル
ト
ウ
ノ

エ
ノ
ケ
ノ
セ
テ
テ
子
下
ヘ
コ
メ
ト
エ
ノ
レ
ト
エ
ノ

オ
ノ
コ
ノ
ソ
ト
ト
ノ
ト
ホ
ト
モ
ト
ヨ
ノ
ロ
ト
ラ
ノ

阿奈以知四十七字母と五十音小配合して

えきべ唇舌牙齒喉五音字其点畫の運縦

ハ縦横ハ横各其類小あまらひて整然と

素亂をさるる奇ありと謂ふし。

阿奈以知四十七字母と詳く小をるに釋

日本紀の開題記小或書云養老四年令安麻呂等

撰録日本紀之時古語假名之書雖有數十家皆以

勅語為先然則假名之本尤在此前身とる日本

紀より以前小假字小先代之りて記せる本

り明らく其假字と云ハ神代文字をりて推

知をしさて其假字の起ハ開題記小於和字者其

起可在神代歟龜卜之術者起自神代云云無文字

者豈可成ト哉とあや是小由て考るに神代文字

ハ太占より起れる小ぞる阿奈以知ハを

ハあ穴町あり穴町とハ釋紀の述義小先師説云

太占讀太町據甲穴躰者也とある是あり穴躰と

ハ周礼原兆の注小原田也とあるの如く田字の

如きものる龜ト秘訣小據小其上と天地と

其左右と日月とし其中央と人と云々隅よ

隅小斜小畫と設くれば、四方四隅とありあり、
 思金神と八意命とも申古事記小思金神令思と
 あるハ、此太古小縁たるるや、咄えたり、されば袖
 中抄師時卿歌小也、思金龜結すけらふ問ば多
 米あひとりと咄ぞうきりたとも詠るものあり、
 まゝ磨通と云も、麻知や云も同語、是共小文
 字れ義あり、龜兆傳小、以天刀掘町とあるハ、龜甲
 の裏小町と掘るる小、神祇令義解小、謂凡ト者

必先墨書龜、然後灼之、と見え、と、同ト、猶書
 字と云、の、し、ま、その表小顯る、兆と也、麻
 知と、天神壽詞小、麻知波弱、並仁由都五百篁
 生出年とあり、其、形状と思ふ、職負
 令義解小、兆灼龜、縦横之文也、とある小、是即文
 字たるる、とさ、とる、七、十、ヒ、ソ、の神言と相義
 一、路、ひ、て、龜ト所の神と坐、久慈、真智命、宇麻志麻
 治、命、並小麻知、と、は、名小負、路へるも、故あるるを

了庵し麻知とまゝ母知ともいふ古今集河原左
 大臣歌ふみちのくは志のふ母知とらりと詠給へ
 るも麻知摺の意ありもちて摺ありと説るハ後
 世のいかりやありあやに大穴持大神ハ大穴町
 とヤに同トく此称號はハもるふて穴町のりと
 知食る著明あり神代紀訓注ハ大已貴此云於褒
 婀娜武智とあまバ穴字ハ正しく婀娜と訓ぬき
 あり万葉七歌ハ大穴道少御神とあるも正しく

字ハ如く訓ぬし武智美知まゝ通音あり大和國
 十市郡天香山坐擲真命神社ハ久慈真智命と同
 神あり小神名帳小元名大麻等乃知神と註せり
 ハ大占字神とヤ義あり庵し又神名帳小武藏國
 多磨郡太麻止乃豆乃天神社とあるハ太占字書
 神とヤ義あり庵し然る小此神ハ大已貴命あり
 よし總國風土記小元えたりされバ磨迹字ハ元
 来穴町小ありいりそのるれぬいすむられ

と書て事通コトカヨハをオヨ及オヨバオヨざりオヨきむとオホ大オホ穴アナ持モチ神カミ小
 至イタりイタ其ソノ磨ハ迹アト字ジとナ撰エラヒ定サダメてサダメとサダメめサダメてサダメ書カキ給カキへカキ故ユエ小
 太フト占ト字ツ書ツ神テとテハテ稱タメしタメとタメのタメるタメるタメ處タメしタメ書ヨとヨ手テとテハ
 ふユるユハユ万マン葉ハフ十ジュウ五ゴ歌カ小コ由ユ吉キ能ノ安ア末マ能ノ保ホ都ツ手テ乃ノ字ジ
 良ラ敞ヘ乎フ可カ多タ夜ヤ伎キ互テ又マタ十ジュウ四シ東アヅ歌ウタ小コ武ム藏サシ野ノ尔ニ字ジ良ラ
 敞ヘ可カ多タ也ヤ伎キ麻マ左サ氏テ尔ニ毛モるモるモてモ保ホ都ツ手テハテ火ホ之ノ
 書テのノ意コト麻マ左サ氏テハテ正マサ書テのノ意コトるコト天テン孫ソン本ホン紀ギ小コ字ジ摩マ
 志シ麻マ治チ命メ亦マタ云イフ味ミ間マ見ミ命メ亦マタ云イフ可カ美ミ真マ手テ命メとトあアるル

真マ手テもモ真マ書テはハ義コト小コ了リとトあアるルべきキ此コノ命メとト兎ウ屋ヤ命メ
 雷イカ臣シノ命メとト合アせてテ龜キトト所トコロのノ神カミとトしシ祠ヒコるルるルハハ津ツ嶋シマ
 紀キ事ジ小コ見ミえエたりリ又マタ神ジ代ダイ口ク訣ケツ小コ神ジ代ダイ文モン字ジ象シヤウ形キヤウ也ナリ
 とトいイへエるルもモ穴アナ町チヨウのノ象シヤウ兆テウよりヨリ出イたタるル磨ハ迹アト字ジとトい
 ふフ義コトとト吹フキえエたりリすス聞ミ書シヨ呂ル宋ソウのノ條テウ小コ我ワ國クニのノ文モン
 字ジのノりリとト記シしてテ類ルイ鳥トウ跡セキ古コ篆センとトいイひヒ續ゾク博ハク物ブツ志シ小
 もモ我ワ國クニのノ文モン字ジれレるルとト或アル横ヨウ書ショ或アル左サ書ショ或アル結ケツ繩ジュウ或アル鏤リウ
 木キ々々いイへエるルもモ此コノ阿ア奈ナ以イ知チのノ體タイよりヨリあアるル中ナカ

山傳信録シヤンデンシヨク小元コゲン陶宗儀トウシュウギの説セツを引ヒキてむむし琉球國リウキョウクニ
 の上表シヤウヘウハ横行刻字科斗書コウトシヨをアアするといへるも
 此阿奈以知アナイチ小元コゲンとありつらむまゝと海東諸國記カイトウシュクニキ日
 本國記ホンクニキ小無男女皆習其國字コムナニョトミテオクニジ國字クニジ號加多干那ガタカニナ凡
 四十七字とある小元コゲン片假字カタカナハりや阿奈以知アナイチ四
 十七字母と摸して作ツクるを推オシて知チるあり堤
 中納言物語チクナノヤノモノガタリ小まづいふあハ書カキりいざればかゝる
 んるふ云々とあるハ片假字カタカナハ伊呂波イロハよりも以イ

前ゼン小出来コイデと人人ヒトヒトのたやま書カキしる知チるあり
 開題記カイタイキ小自昔傳來之和字コヨリカシデニライノヤトナ於伊呂波イロハ被作成レツクリナシ之
 起也オキナリとある傳來之和字デニライノヤトナと云もをるハち阿奈以アナイチ
 知チのりノとゆえキコり神代諺解ジンダイガンカイ小神代文字ジンダイモンジハ墨譜ハカセ
 ノ始聲シヨウシヨウノ上下スルニ從テ字亦上下スルシヨウカ変アリ
 灼龜五割ヤクカメライツニサク云々此灼形ヤクカダチノ曲折キョクセツニ從テシヨウツ一万余ノ文
 字出来ルナリ云々とある小据ココとバ上古史籍シヨウコシセキの
 墨譜ボクフに用モチはるハ此阿奈以知アナイチありををくくままと此四

十七字と合連といハ一万余字小もなるとさると
 同文通考小ト氏所傳一万五千三百七十九
 字乃是灼龜之兆猶卦之有爻也といへるも神代
 諺解小据る小やもん又本朝學原假名鈔序に逮
 于皇祖瓊杵尊受命自天龍山降蹕之秋大詔乃
 命迎之雲衢以演卜之五兆矣是乃國朝神代文字
 之事祖而義理之宗也惜哉書法之不可得而知也
 といへるハ龜兆傳小りやづとて説とゆえなり

諸説シヨセツなる同趣オチオモキなり然バ彼肥人之字といへるも
 別體ベツテイなる非アラどやうや此磨迹字ハニナ小てことなつら
 めかして和漢三才圖會ワカンサンサイブエ小或書シヨ云天照太神告大
 已貴尊其靈句曰人含道善云オホアナムケミコトトアマ大已貴尊與天八
 意命同意イミオミトオミウヨロモテヲ以是言造神代文字コトゾク以是四十七字通連カハハツラズ
 作万言句今以秦字代テシナジ於神字カミナといへる人含道善ヒミフミ
 等トウれ義釋字ギシヤクジ小ハ疑ハウタガハシたあし無ナキ小ありはとい
 へオホアナムケる大穴持神八意命オホアナムケ小謀ハカリて神代文字カミナと造ツクる

云云説ハ古傳説もるるをきり上件小引合イ考知
 登し出雲風土記小五百津鉏神鉏所取而所造
 天下大穴持命とあるも五百津鉏神鉏ハもるハ
 ち穴町と周知小天刀のりふて當時太占れ神術
 小天下と化し居るるハ御祖父八束
 水臣津野神の國曳の故りふても知るる其
 國曳の古語小童女宵鉏所取而とあるハ天刀の
 り大魚之支太衝別而とハ穴町と周知もる波多

湏ハ支穗振別而とハ所謂波ハ迦の火もて穴町
 灼り小當れり且風土記の秋鹿郡條小惠曇濱
 云々即有彫鑿盤壁二所云々とある盤壁こそ大
 穴持大神の撰定し居る穴町の磨迹字と周置
 居るふてるべきと其傳の漏るるを遺憾るる
 戊申上件の考證と作られどもいまい古書の
 中此磨迹字と用ひし證例とえざればいとあ
 うぬるに思居つるに手近き釋日本紀の秘訓の

片假字の中ナカに見ミ小磨迹字コモノと雜用ミダと見出イダせ
るルと實ホト小大穴持オホアナモチ大神オホカミのノあよるアヨル恩頼オンヨリ小コいイと
磨モノと其明證ソノアキラカシメハ

釋紀秘訓シヤクキヒツクン口閉クチヒの傍訓バウクンとククチチツツククヒヒテテとトハハ本ホン

ハハフフフフフフヒヒフフとトしシとト片假字カタカナ小引コヒキあアはハ時トキヒヒ

字ジをヲかりカりリをヲづツいてテ適タくク遺ヰるルとトのノなナるル磨モノしシ

又白鷺オシロイの傍訓バウクン小コシシロロキキツツババヒヒ私記説シキセツとト是コトもモ

本ホンハハ七シ山サントトキキツツババヒヒとトけケむムと改カめメたるルがガヒヒ字ジ

ばバうウりリたタまマくク改漏アラダモラとト遺ヰるルものノなナるルべベしシ

又百濟僧クダラツクホウシの名ナ慧ヱ旃センの傍訓バウクン小コエエヒヒとトるルヒヒの傍カタハラ

小コアアと注シユとトりリアアハハ古抄本コセウホンの假字カナ小コ美ミの省ハクキアア

かりカりリとトいイへエりリ弥ミハハ民ミン卑ヒ反ヒカシ小コ漢音カンオンハハビビ吳音ゴオンハハ

こコらラりリ人ヒト名ナ等ナド小コハハ吳音ゴオンと用モチフるル例レイありアリ同秘訓ドウヒツクンのノ

中ナカ小コ奈ナ未ミ伊イ旃セン買カイなナと假字附カナツケあアるルがガ如カしシ然シカレババ

ヒヒハハ磨迹字モノのヒヒ小コ非ヒとトアアラ非ヒとトりリ

知チべベしシ右三條ミドリノミチ古書コショ小磨迹字モノのヒヒ字ジと用モチひヒとトるル

明證なり。

又檜隈の傍訓とヒノクトハ作^ツ、竹嶋とタカシ
キハ作^ツ、トハト字^ジなり。キもトの誤^{アヤリ}なる^ヲ推^{オシ}知^ル
也。是亦古書ハ磨迹字^ナのト字^ジと用^{モチ}ひたる^ヲ證^シと
も也。

右ハなる^ミどらへ^キ考^カる^ガに^ニ秘訓^{ヒクン}の傍訓^{バクン}の假字^{カナ}の中^{ウチ}
磨迹字^ナの誤^{アヤリ}なる^ヲハ^ハ思^{オボ}ひ^キ字^ジども^ハいと
多^{オホ}し^ソ其^ハハ

畫滄海^ナと訓^レじて、アヲウナバラヲ、シホユヲロコ

ヲルカヒナシテ、是古事記之說也。但舊說只畫讀

カキナ瓜^{スト}とあるカヒナシテのヒハ^キ字^ジの誤^{アヤリ}か

るべきなり。痛入^ホ骨^子髓^ニとある七^キ字^ジの誤^{アヤリ}なる

也。痛^ムとイタキと訓^{ヨム}みハ同秘訓^{ヒクン}ハ何痛^ホ之^{コト}

酷^{カラキ}とある^ハ明^{アキラ}なり。

小夫人^{シム}生子^{ウメツ}とあるハウ^ウヒツ^ツの誤^{アヤリ}高^{タカ}榭^{シヤ}館^{カン}ハ^ハコ

ヒノムロツ^ツヒ^ヒの誤^{アヤリ}なる^ヲべし^ハ本^{ホン}ハ^ハツ^ツチ^チの^ノる^ル小^コタ

と書添カキソとるハヒと片假字カタカナのチの誤アヤマリとえてムロ

ツヒとムロツタチと讀ヨミたるものなるべし館クワンと

ムロツミと讀ヨムハ阿斗河邊館アトカヘノベノクワンの如し

曆博士等コゴアハカセドモニとあるコエミハヨリアヨリアの誤アヤマリの横河ヨコガハの

コも同じ

前慮不定ナラズシテとあるハトラズシテの誤アヤマリなるべし前サキ

慮不定オモハリトラズシテなり

鳩集モトメフツメテハモトメフツメテなり脚帶ケビのワルファワルファの誤アヤマリ

なるべし

隱郡ホバリノコホリのホハ子ナの誤アヤマリ所居シヨコのナも子ナの誤アヤマリなるべ

きさなり

粟大軍シロモトノイクサハクハモトノイクサ也

大分君オホキマテハオホキタノ君キミの誤アヤマリなりむ

又任那イマナの國クニを別言條ワケイフトコ小散半下國コサンゲノクニとあるハサ

ムハンゲノ下シタ小賢コサカシらにニと書添カキソと

る小やあらむ

和什效字

又不可^ス以^カ卑^イ賤^シ為^シ使^トとあるツカモハツカ七と誤

とある

為^タ度^メ百^ニ人^トとあるハ為^タ度^メ百^ニ人^トなるべし十^サセキの

十^サハ磨^ク迹^ニ字^ナなり但^レ此^{コト}十^サ字^セハ多^ク七^ト小^シ作^ルなり草

野^ノ姫^ノの訓^ハ小^シ古^コ事^シ記^キ云^ク鹿^カ屋^ヤ野^ノ姫^ノ安^ヤ氏^シ説^セ草^{ソウ}讀^{ドク}如^ク字^ジ

假^カ名^ナ本^ボク七^シノヒメ止^ト讀^ム之^ヲとあるなるなり

秘^ヒ訓^{クニ}中^ノ最^{モト}多^ク七^ト字^ヲと用^ヒひなり十^トと七^ト小^シ作^ルハ片^{カタ}

假^カ字^ナの十^ト小^シ混^マハりぬざるためハ或^ハハ七^トの省^{セイ}字^ジ

と云^フ然^レもあれど七^トハ磨^ク迹^ニ字^ナの體^{テイ}なりハ草^{ソウ}書^{ショ}

の體^{テイ}小^シ運^{ウン}筆^{ヒツ}の法^{ホウ}も違^ハるやうなり猶^ナ磨^ク迹^ニ字^ナ小^シ

てあるべきなりさて件^{ケン}の如^ク片^{カタ}假^カ字^ナの中^{ナカ}にた

ま^シ磨^ク迹^ニ字^ナの遺^{ユイ}なりハい^ハらふと云^フに上^シ古^コの假^カ

字^ナ本^{ホン}ハ磨^ク迹^ニ字^ナ小^シなりとそれと漢^{カン}字^ジ或^ハ

ハ片^{カタ}假^カ字^ナ等^ト小^シ引^ヒき世^ヨ小^シ至^シり取^リとづいて元^{モト}の

ち^ニ書^キらるもあるべし其^{ソノ}後^{ノチ}の世^ヨハ小^シもそれ

小^ナ智^チひて書^キけらるるハ磨^ク迹^ニ字^ナたる事^{コト}知^ラび片^{カタ}

神代文書

假字の誤字とて妄小似よりの片假字小書易
 たるもあらずなきなり。か小かく小古書の中小上
 ト等の磨迹字と用ひしる證炳然なる時ハ戊申
 考證の虚めざりしと知をしかくして此磨迹
 字と漢字小書易たるハ聖徳太子以来の事と
 清原國賢朝臣の日本紀表文小推古天皇御
 宇聖徳太子云ハ故始以漢字附神代之文字傍と
 してたるふてさしるべし其後片假字平假字等

起て使用する事なれども磨迹字ハ遂小かくれ
 漢字とさしてマニナと呼なりになれた
 ハいと歎らばしき事ならば長きまなかなの
 称ハ源氏物語梅がえ巻小ええたる然るに今此
 聖代小當て幸小阿奈以知四十七の磨迹字傳
 きてこれと稱ひしる明證も顯りれぬる事ハい
 とくしるるがしき事小ぞるをふられあのしな
 から大御世の御榮のひとら小しとかの書負る

神龜の出たりをむ故にふも多ふへざらめやも
たへざらめやも

穴町之道知食神在也大穴道登御名称坐

右效釋日本紀秘訓假字之例

嘉永元年歲次戊申三月 鶴峯戊申

附録

天武天皇の御時撰しめ給ひし新字ハ、いかな

る體の字なりを、釋紀小新字部私記曰師說

此書今在圖書寮但其字跡頗似梵字未詳其字

義所准據乎とあるに據バ、ち不悉談休父の如

く、父字母字合して字と生じたる類の津嶋紀事

上縣郡佐護郷濱久須村神社條小云く、熊野權

現社祭雷大臣命祠官傳神功使雷大臣命於新

羅娶彼生子名日本大臣命併雷大臣日本大臣
 磯武良称熊野三社權現有匣藏社不曾發視謂
 之不開箱貞享丙寅令發之有梵夾十卷蠹滅不
 可讀といへる此梵夾と云も此果して梵字を
 雷大臣命ハ見屋命の後胤ふて龜ト所
 の神不扱ハ其れバ其子ハ磨迹字ふて書傳
 神代の遺書ならんも知能からばまゝ世小
 靈符小似たる四十七字所の神社小傳ハ

て神代文字と呼なれども然れども是等
 ハ書法さどかならば繩小も結がくも水小も
 鏤がくも是ハ所謂靈符文字ふて世間通用の
 磨迹字トハ異なるべし延享年中小磯野某が
 神代文字辨といふ書を作て神代口訣の説ま
 と光海翁の和字傳來考ると破したまひども
 是等もかの靈符文字などの論ふこそあらぬ
 今戊申が考證する所といふことやるべし又世

不
イ
...

小對馬の阿比留氏の傳ツマ々々神代文字とツマ

あり其ハツマ

丁上十十の象カタチと母畫ボとしへ合ス口フ口ツ口ル口ヌ口ク

正口〇の象カタチと父畫フとしも父母ボ合アて諸字モトと生シ

まボるシ梵字ボン蘭字ランの如ゴトく朝鮮チウセンの諺カン文モン小コいイとトよ

く似ニたりリ天保十二年テンポウニニニの新刻シンコク觀古雜帖カンコザツテフ小東大

寺新造シンゾウ舎シャ文庫ブンコ所藏ショウザウ田券テンケン伊賀國イガノクニ阿拜郡アバイノ柘殖郷ツキエサトノ

長チヤウ尾ビ氏シ永用エイヨウ印章インシヤウハ神世文字カミヨノモンの草書サウショハハ

とあげつらひト朝鮮チウセン天竺テンシクママレイレイイスイスホルホルラランン

ト等諸國トウショクコクノ字法ジホウ概ガイメメ云クニトキトキハ大抵ダイテイ同様ドウヤウナル

中ナカニ朝鮮チウセン文字モンジハ特トクニ近似キンシノモノモノく其字ソノジノ始ハジメ

ハ三韓サンカンノ時トキニトト洪武フウブ廿八年ニニヤウハチハチニ活版クワツパンノ明律メイリツノ跋ハツ

ニ見エタリニ是コトニ依テ考レバニ神后カミノミコ征韓テイカンノ後ノチ神カミ

字ジヲ彼土カノドニ授サツケ給ケヒシガ真形マシガタノミミヲ解カイシ得エテ

草書サウショヲハ學得マナビエガリシニヤニ今彼土イマカノドニモ遺ノコレル

モノナシといトハ是等コトハハ天武天皇テンムヒの

申代文字考シナシモノ

十七

朝テウの新ニヒ字ナ小ハありさるやカウガハ考カウすカわカきカるカ
にもむ

又立ウツりリ考カウるカ小廣クワウ黄ワウ帝テイ本ホン行ギヤウ記キ小東トウ到リ青レイ丘キウニ

見ミ紫シ府フ先セン生セイ登トウ於ニ風フウ山サン受ウケ三サン皇クワウ内ナイ文ブン天テン文モン大タイ字ジと

云イフるルえエえエ山セン海カイ經キヤウ海カイ外グワイ東トウ經キヤウ小青セイ邱キウ國クニ在アリ其ソノ北キタニ云

云イフ豎ジュ亥ガイ右ウ手シュニ把トリ算サン左サ手シュハ指サス青セイ邱キウ北キタニと云イフるルえエえエま

と列レツ子シ湯トウ問モン篇ペン夏カ革カクの語ゴ小龍リョウ伯ハク之ノ國クニ有アリ大タイ人ジン云

云イフ一イツ鈞テウ而ニ連ツラ六リク鼈カウ云イフ云イフ灼ヤキ其ソノ骨ホネ以テ數ス焉ス張チヤウ謨モ注チュウ不

數スウ算サン計ケイ也ヤとモ見ミえエるル是コレ等ラをワ我ガ神シン世セイのシり

実シツとキコつクりク小テシ天モン文タイ大ジ字ジとツひヒ右ウ手シュニ把トリ算サンとツひ

ひヒ灼ヤキ其ソノ骨ホネ以テ數ス焉スとツひヒへル小テシ我ガ神シン世セイ小モン文モン字ジ

有アリしル算サン法ホウ占セン術ジュツ等トウのノ有アリりク知チるルちチりリ神シン言ゴン

四シ十ジュウ七シチ字ジのノ一イチ二ニ三サン四シ等トウはハ數スウ量リヤウ小コ涉セツたタるルもモ深フカキ

理コトワるルとツ知チべベしシさサねネババ成テイ形ゲイ圖ト說セツ小コ田テン賦フ集シツと

云イフ書ショとツ引キてテ古コのノ田ケン券ペンハハ一イチ段タンとツ十ジュウ小コ分ブンをワ其ソノ一イチ

二ニ三サン等トウとツ一イチ二ニ三サン四シ一イチ二ニ三サン四シとツ記キせセるル一イチハ

神代文字

神代文字なるを知らし
片假字のへつ二字平假字もあ
其本字いさく詳あるさるハ
神代文字のフ
二字より出たるもねとね
按小四十七言の靈句人含道善等
字ハ偽書大成經小出より是ハ
四十七言の靈句ハ我神州第一
尊崇を履き天津詔戸なる
故小偽書小もさあつねなる
べし

然ども此真此神字ハの偽書
小よりて傳ふ
またる小あつね既小釋日本
紀小もええたも
ハ真の神字なる疑を容
履きにあつざる
又介貝蚌属小蛭といふ貝
あり和名抄小唐韻
と引て蛭音擗辨色立成云
萬天蚌属也本草
草と引て馬刀一名馬蛤和
名上同とあり本草
綱目小蛭生海泥中小蚌也
長二三寸而大如指

申代文字

兩頭開其形長短大小不一其類多云、和漢三
 寸圖會小これと引て其圖と出せり、其形よく
 穴町の畫小似う、されば萬天とよぶハ真手
 の義小一て真手ハむらゐち真書なり、穴町の
 形象より出たる名なるを、後撰集戀五源英
 明朝臣歌みいせの海うみのあまれまてぐさいと
 するまなぐさへまなぐさぞ恨むうらみよめ
 るあまれまてぐさハまなハち此貝れりまて

元来ハ天真書形まことなりと天と海人小取成とりなり
 るるべきなり、袖中抄顯昭説小、あはるはてぐ
 ことハあはるまてと云うひはりのことあはと
 なり云、秋冬春とるとぞや、夏はてよとさ
 す小なり、あはるまてと云うひはりのことあ
 豎横たてよこなるふて、穴町の形象小なり、
 て、神代文字の考證かうしやうともべきものなり、

和仁文字考

季秋之晦。罔此書畢時。連雁數
行。或縱或橫。作畫於穹蒼。頗似
神世之磨甬。有感書之。

侍從藤原

缺木文字考序

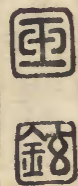
蓋有國是有土。有土是有入。有入是有道。
焉。自_下參神造天地。二靈生萬物。各國出聖
者。建道設教。莫有不治斯民者也。夫皇華
日孫垂統之地。古道之存于今日。固非萬國之
所可_以其。神教之至大至博。誰能得徧觀而
盡識之哉。或謂我邦無有教。是不思也。二
靈則奉教而立天柱。大汝則奉_以而營地
維。天祖之臨。烈聖之業。豈其非教乎。或
謂我邦無有文字。亦不思也。如古訓之赫

於萬世。雖是因寶祚之夢究言靈之所助。而無文字也。奚能得其傳之乎。久遠如是耶。古曰。結繩鏤木。果其無文字也。以何結之。以何鏤之。然而治之無教。無文字。皆不思之過也矣。近今學人智慮大開。靡不崇尚古訓。於是聖神大教之指。粲然復明矣。而至如其文字。則未聞有論定焉者也。我鶴峰季尼先生。嘗深說究理。學其所著若干卷。所以開示來學者。不鮮矣。屬者有所證據。乃作斯書。以詳明太古鏤木之文字。外則極其點畫之所起。內則盡其音聲之所

發。詢足以觀神人開物之微妙也。我及書成。門人爭騰寫。置郵為之。聞渡邊氏獨懼其走筆之間致誤。因為清先生校刻之。俾余書其事。余從事先生之日淺。耳。然受其教者最深矣。所以謹從其言也。

天保九年歲次戊戌晚春

門人 淡海古川昇 撰



半仙中根容 書



鏤木文字考序

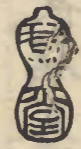


慶元以降。主聲宣化。文雅盛旺。碩匠輩出。論辨
國學者。不一而足。雖然其所論辨。皆不出於五
十音外。則一條禪閣和訓押韻。僧長。文字鏤
之流亞。而不能脫於方言譯辭之類。天下滔滔。
猶觀水者。徒知江河之大。洪流從瀾。未嘗有溯
乎上古神世之文字者。友人鶴峰李尼先生。有
慨于此。考之典籍。證之金石。研尋檢覈。有所發
明。若絲之引緒。錯綜不紊。其一方中。縱橫斜歪
函含萬粟。斯之可以為音。連之可以為義矣。其

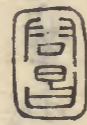
A large rectangular frame on the right page, containing several vertical columns of text that are extremely faint and illegible. It appears to be a table or a list of entries.

簡易直截。樸素慈實。不似乎中世以降。才聲轉
音。稍涉煩雜。而古質之意。不可復見焉。嗚呼。季
尼博學洽聞。無不通曉。存於斯書也。安可謂
發揮千古之秘奧矣。管子有言曰。思之思之。又
重思之。則鬼神以告焉。此之謂也。
天保九年夏四月朔旦

琴臺 東條耕叙



龍泉居士

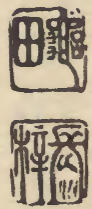


鴻蒙既闢。神聖茲降。立道施
教。繩以結之。木以楔之。文字生焉。
音韻出焉。同文心治。郁乎備
矣。孰謂上世無有文字耶。惜世
遐籍湮。不能舉其全也。然其文
散見往牒者。尚多有之。明之
存乎其人。余讀鶴峯先生楔木

文字考識其能闡神聖幽深之微焉。蓋神代之文凡四十七字。原於天神十言之教。皆清音而無濁音。點畫縱橫象形不文。其法簡易便捷。可以通四方之志矣。其音韻之所從發。點畫之所從起。發揮闡揚。確有

明徵焉。則非特觀先生開物成務之學。斯編之於有關於世道。余知其非阿於先生也。
戊戌初夏皇極之日

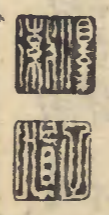
綾瀨龜田梓撰



黃備氏之不知臧也。曩者鹿兒島侯嘗
表章斯文而藝苑未有言其說者。吾
友季尼深慨斯文之湮沒。箋釋其義
以使其可行于于世。即後世有方者作而
益行斯文于四方。則季尼之功其不虛
矣。吾以季尼既如此。信將來必有其
人也。是以敢握三寸之管。聊泄憤于
赫蹠云爾。

天保戊戌孟夏

熊山澤微識



結繩書勢無國。吾之
我邦宜有。我稱文字
而古今豈傳以邪。一閱
此編如審吾之書。自有在
吾設以鶴峯氏出于秦

云云亦不復依波之草
是為可憐可 戊戌四月

温山川北書燕

亦亦 亦亦 亦亦 亦亦



題渡本之書考

摩空抄卷

推古天皇

因覽博達才總括古今事
格物究理學推古天皇
八科捷法古既教人始醫
鑿末方字考後使鬼神哭
三百字年昇年恩
六十州中非常人

善唐信孫信古



浪華中富保全

方中山斜雅橫畫昂是天地生物形
夫子究理尔子弟字内之尔自此形

武藏安倍昌純

園出河字書出流前聖後聖外宗謀
欲識 皇字書漢本字以漢先生新
著也

神州自以之神而中流托何信鐘之五古
生上好人未漢孝子凡好學如并張

海浦 本内範類

題銀木文字考後試用神代文字

鶴峯戊申

七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

桃井義喬

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

瀬戸久敬

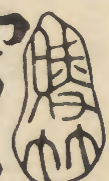
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百



幸^{サイ}ふ^ハやハ。あなう^ハはく^ハ。かく^{コト}云^ダ天^{テン}の幸^{サイ}あ^ハて。辞^ジの象^{カク}乃
世^セみ^ミ顯^アハ^スる^ハよ。あなう^ハはく^ハ。かく^{コト}まつ^フぶ^ハさ^ハあ^ハう^ハは
引^ヒて。こ^コの書^シのさ^サあ^ハめ^ハる^ハよ。

天保九年やよひ

會津左中將家才佐藤忠滿

天保九年
會津左中將家才佐藤忠滿
引てこの書のさあめるよ


 言り多結泥毒也天舒
 治乃長世此工字子復
 甫大言言留年志冲
 代流以多牛人

今少勝也年志



題嘉永刪定神代文字考 隨得錄之 不拘序次

文字止云言者漢言文字止云物者漢文字神國之神乃御世尔者文字止云
モレ一イマゴトハカラゴトノモジトイフモノハカラモジノカニニノカニニニヨニハノモジトイフ
 言志無禮婆文字止云物者不在止人毛云者吾毛然古曾止思乍在計流物
ゴトシナケレバノモジトイフモノハアラジトヒトモイハバワレモサコソトオモヒツノアリケルモノ
 乎太麻尔之其占兆尔顯流流麻尔乃兆古曾神之代乃文字尔者有計禮其麻
ヲフドマニノソノウラカタニアラハルルニノカタコソノカエノヨノモジニハアリケレソノマ
 尔之麻尔互布言之漢言之文字互布言尔其聲乃通閉流志母叙奇人毛靈妙
ニノマニテフゴトノカシコトノモジテフゴトニソノコエノカヨヘルシモゾシシクモクスシ
 加理氣流其麻尔者穴麻知乃麻知穴伊知乃伊知尔通比互占兆尔顯禮出流其
カリケルソノマニハアナマチノマチノイチノイチニカヨヒテウラカタニアラハレイルソノ
 兆乃名尔古曾有計禮諾那諾那大穴牟智乃御名古曾者其穴麻知乃麻知乃
カタノナニコソアリケレウヘナオホキムチノコソハソノアチマチノマチノ
 名乎負世流御名穴麻知之麻知乃兆毛互諸之事書記須事者志母此大神
ナヲオハセルコナノマチノマチノカタモテモクノゴトカキスオコトハシモコノオホカニ

乃御議尔出多利計牟止鶴峯乃吾背乃翁曾委曲尔諭多利氣流多布止岐

波此之一卷字禮志岐波此之言舉古昔乃物識人毛多和也須久阿支良米

兼之神國之神之創之其麻尔乎今乃現尔見我多布止佐

麻尔乎麻知麻知乎麻且止毛云介禮婆諾毛文字乎曾且止者云介牟

右

猿渡容盛

伊尔之方乎志乃婦母知須里義太禮多利氣牟世世乎經且能古禮留万尔

名見留我多布止佐

田中好連

千早振神世乃文字乃徵書讀且神代乃道乎知畢

久保季茲

思金思量且造氣牟神世乃真尔字見叙字禮之岐

折井正邑

靈幸神乃定之鳥乃跡幾萬世毛加波良謝流倍之

木邨安知

謙事波善禮土有麻爾乎無止波誰加言初尔計武

筒井重成

每物尔復古御代奈禮也神代能鳥乃跡毛見行

柳原忠義

天下尔幾萬世乎經多流蘭神能遺世之太占乃跡

柳原忠義

天照神能教之麻尔乃跡天之下在人尔傳且

同 鶴子

皇神能作賜之麻尔奈連也聖乃御代尔顯禮尔計里

吉子

玉鉾乃道明計幾例古曾賢岐書乃光奈利計利

雨宮干政 水戸人

踏分且見毛賢之敷島也大和島根乃千世乃古道

久方定祥 水戸人

日本乃遠津御祖乃尊佐毛天浮橋跡見且叙知留

三輪從善 水戸人

千速振神世乃事母水莖乃流且今尔不絶賢佐

高島恭興 水戸人

流且乃末乃世萬傳毛不濁波水上清岐水莖乃跡

朝比奈恭吉 水戸人

大穴武知少彦名能昔與利傳來去龜乃占文

林 忍 江戸人

正直奈類神乃心乃一筋尔結留繩能穴伊知茲流之

三好義頼 江戸人

漢文字乎不借神世波穴尔也之穴町尔言通之尔氣武

菅原信好 江戸人

明氣幾御代乃例乃鏡山神世乃影毛移之來奴良武

出淵盛行 江戸人

神世與利天之真書形傳里豆管毛繩者結謝里劍

林 元英 江戸人

天下乃文字乃始也太占乃真字與利出之天文大字

有竹真直 江戸人

君子乃國止稱之神國尔神乃定之真名無良米也

有竹真常 江戸人

積多流机乃塵乎搔辨神世能鳥乃跡乎見哉

椋渡盛章 武蔵人

天地能成乃隨意成留形乎今乃現尔見哉之佐

高野維直 常陸人

集氣武宍能螢乃光與利神代能麻尔毛顯禮尔劍

卜部晴秋 對馬人

上津代乃神能穴町君無波埋禮南萬之知人無尔

鈴木秀世 伊豆人

靈幸神代乃真智乎如何思大穴持乃神乃真智形

荒井静楚 上野館 林人

人乃言聲能限乎盡而有麻尔古曾文字乃始奈流良之

新井甕俊 上野人

若無波造互之我止思鶴御國乃麻尔那見我之左

杉浦時敏 周防人

時之有婆世尔顯留留穴町乃穴尔算岐此能解說

伊能頴則 下總人

籛我乃子我不燒有執婆上代乃磨尔乃麻麻在書毛見麻之字

鶴峯宣義 豊後人

筒粥之其神事毛布登萬知乃萬知乃兆見留占部奈類良之

中澤杵字

天下萬國乃文字者皆神代乃磨再乃流登叙聞

榊原甫壽 上總人

神乃道世々爾傳互太占乃麻通毛韋布國叙尊岐

佐々木一陽

天下萬國乃祖國乃天津壘也天乃真書形

田邊正尚 越後人

讀神代文字考有感

舊知文字並為根。今聽假名ト是源。請看東方

神聖教全然即在此中存。

右

熊山澤徽

料斗篆蟲何足比。仰看神代古文字。期君更把課窓毫。改寫當年日本記。

右

靜軒居士

賀戊申先生初逢誕辰

戊申先生誕戊申。今茲初逢一戊申。二三戊申何足數。戊申戊申還戊申。

右

篠田良忠

題神代文字考後

神代書名知者少。因君輯錄世初者。叔孫蝌蚪何曾讓。千歲長令博雅歡。

右

吉田靈鳳

追加神代文字考贊

不朽那遠伎神代乃藻塩艸書集奴類人乃其名波

今村利次

八百萬神母守武其御世乃跡踏開久君之齡者

武藤吉祥

鶴峯乃大人乃功尔顯留々遠伎神世乃鳥乃跡哉

藤田重任
並豊後人

神世乃麻尔與利出志異國乃文字乃傳毛尊有見

中村光久
常陸人

嘉永刪定神代文字考跋



夫古今論字者。不徵思於千古。不顯心於抽繹。徒勤襲前聞

云我。上言之世無有文字。其妄其昧。既不有創闢之識。復何足

窺於大哉。始坐井望洋之鄙者也。於是鶴峯老叟。歷年累月。

沈思默想。檢傳信於古典。定品騰於諸言。遂探得太古四十

有七言。爲諸辨正。極其精核。確乎立於神代有文字之考證。

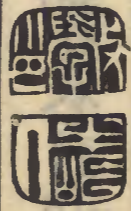
其言曰。伏惟夫。先王之對。遠垂教於天下也。使四海之義理

必歸之於文字。易曰。帝出乎震。帝即我神聖。出於我王於赤

縣也。始畫八卦。造書契。八卦乃是原於太占。吳語謂之天占。書契乃是太占縱橫之文。起乎神字者較然矣。通鑑節要有言。夫論字者。皆謂始於倉頡。而不識始於伏羲。伏羲制字。至倉頡大備。嗚呼。南湖亦類乎翁人耳。是知漢字固出於我。而復還於我者。何容疑哉。今也請官刻是編。使千歲湮滅之神字。再明之於世。何幸加之。其功可不謂神聖之忠臣乎。喜而書其端如此。

嘉永元年著雍涖灘十月既望

安縣為敷謹誌



刪定神代文字考後序
余讀海西先生之著書。其所論。譔拔地倚天。橫截衆流。如風如雷。靈怪不可方物。而咸是渾然考證之言。自非負異才。聰穎絕世。誰能得如是乎。其刺語學新書也。先生自携來。質之。余先人於擁書倉。先

人一讀大奇之。即序其書謂是乃和漢語學之創法。雖復更千百年。而勿之有改也。近者又有神字論定之作。唯憾先人既沒。不及見此書。蓋字學居六藝之半。而溯其流。窮其源。則知其起源實在我神聖之所創。而天下之學術悉

從此出。人天擁護。無之於字宙之際。無疑也。先人若在。則其擊節為何如也。余雖不敏。不勝讚歎。聊書數言。以附其後爾。小山田與叔俊平題

岡田芳胤書

